

# 日本特殊教育学会第54回大会参加報告

## 平成27年度重複班牙備的研究「小中学校等で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実」に関する研究成果の発表と情報交換

齊藤由美子\*・小澤至賢\*\*・大崎博史\*\*

(\*研修事業部) (\*\*情報・支援部)

**要旨：**日本特殊教育学会第54回大会の概要と、同大会において本研究所重複班牙を行った研究成果の発表及び情報交換の内容について報告する。日本特殊教育学会の平成28年度第54回大会は、平成28年9月に新潟市で開催され、3日間で2,300名を超える参加があった。本大会のメインテーマは、「インクルーシブ教育の時代における Special Education」であった。重複班牙では、平成27年度予備的研究「小中学校等で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実に関する予備的研究～就学の経緯、教育目標・内容、交流及び共同学習の状況等に焦点をあてて」にかかる研究成果をポスター発表し、また、自主シンポジウムを企画・運営して情報交換を行った。このポスター発表、自主シンポジウムの内容は多くの参加者の関心を集めるものであり、本大会テーマにふさわしく、インクルーシブ教育システムにおける重度の障害のある子どもの教育のあり方、方法、展望等について、大きな示唆を与えるものであった。

**見出し語：**日本特殊教育学会、大会参加報告、重度の障害、小中学校

### I. はじめに

日本特殊教育学会第54回大会は、平成28年9月に新潟市で開催された。本大会において、重複班牙では、平成27年度重複班牙備的研究「小中学校等で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実に関する予備的研究～就学の経緯、教育目標・内容、交流及び共同学習の状況等に焦点をあてて」の研究成果について発表し、情報交換を行った。ここでは、本大会の概要、及び重複班牙を行った研究成果の発表と情報交換の内容について報告する。

### II. 日本特殊教育学会と第54回大会の概要

日本特殊教育学会は、特殊教育、特に障害児教育の科学的研究の進歩発展を図ることを目的とし、全ての障害種とその関連領域を含む、わが国で最大規模の学会である。正会員数は4,046名(平成28年6月28日現在)を数えるに至っている(日本特殊教育学会ホームページより)。

第54回大会は、平成28年9月17日(土)から9月

19日(月)の日程で、新潟市にある新潟コンベンションセンター(通称：朱鷺メッセ)と新潟日報メディアシップ(通称：メディアシップ)にて開催された。大会開催期間の3日間で、2,300名を超える参加があった。

本大会のメインテーマは、「インクルーシブ教育の時代における Special Education」であった。このテーマ設定について、大会委員長である新潟大学教育学部の長澤正樹氏は、このように述べている。

*障害者の権利に関する条約を批准し、わが国の特別支援教育も新たなステージを迎えようとしております。障害のある子どもも地域にある通常の学級で教育を受けることが当たり前の時代、学校教育はどのように変わっていくのでしょうか。多様性に対応すべくユニバーサルデザインがキーワードとなる中、平成28年4月から障害者差別解消法が施行されます。学校教育現場においても、「合理的配慮」が保障されるようになります。そこで、インクルーシブ教育の時代を迎えるにあたり、あえて「Special Educationの意義とは何なのか」を考えてみたいのです。*

(日本特殊教育学会第54回大会ホームページより)

このようなテーマにふさわしく、重複班からは、予備的研究「小中学校等で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実」の研究成果に基づいたポスター発表を行い、さらに情報交換によって理解を深めるために自主シンポジウムの企画運営を行った。

### Ⅲ. ポスターによる研究成果の発表

9月17日(土)に新潟日報メディアシップ会場で行ったポスター発表では、「小中学校等で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実に関する研究～教育目標・内容、交流及び共同学習、支援体制に焦点をあてて～」という表題で研究成果について発表した。

#### 1. ポスターの概要

ポスター発表の内容は、重複班の平成27年度予備的研究で行った研究成果の報告である。この研究の目的は、小中学校等で学ぶ重度の障害のある子どもの教育の充実を目指し、インクルーシブ教育システム構築における重度の障害のある子どもの教育について、事例を通じた情報収集を行い、その現状と今後取り組むべき課題を整理することであった。

研究方法としては、学校教育法施行令第22条の3に該当する程度の障害がある、またはそれらの障害を2つ以上併せ有することを条件とし、都道府県及び市町村教育委員会等の協力を得ながら、本研究の対象となるケース6事例を抽出した。対象となった学校関係者及び研究協力者が参加する研究協議会を開催し、研究内容に関するフォーカスグループインタビューを実施した。インタビューデータは質的研究の手法を用いて分析を行った。さらに、学校訪問等で収集した情報について、フォーカスグループの結果等を参考にして考察を行い、現状と課題の整理を行った。

抽出されたサブカテゴリーの関係を整理し、関連図としてポスターに示した。分析の結果、「本フォーカスグループインタビューの参加者である教員は、小中学校を教育の場とする意義を感じながらも、『子

どもが何をどう学ぶかの明確化』『子どもの学びを支える仕組みづくり』の重要性を訴え、様々な課題を認識しつつ、それらに対応する工夫を行っていた。」というテーマが浮かび上がった。

分析の結果、重要性が明らかになった事項としては、「教育的ニーズを考慮した制度や予算措置」、「本人・保護者や専門家を含めたチームによる個別の教育支援計画の作成」、「合理的配慮を検討する手続きの明確化」、「特別支援学級における教育課程の考え方と育てたい力の分析の手続き」、「重度の障害のある子どもが小中学校で学ぶことの意義と価値観の共有」、等の事項が挙げられた。

本研究の考察として、これらの事項を小中学校の現場で確実に実施するためには、「子どもが何をどう学ぶかの明確化」及び「子どもの学びを支える仕組みづくり」の視点から、教員が毎回最初から労力をかけることなく、周囲と共有しやすいシステムを確立させていくことが、今後の課題であると論じた。

#### 2. ポスター発表の様子と参加者からの質問等

ポスター発表には、特別支援学校の教員を中心に多くの参加者が訪れ、熱心に説明を聞いたり、質問をしたりしていた。中でも、重度の障害のある子どもが小中学校で学ぶことの意義や、特別支援学校のセンター的機能の役割の充実等について、発表者との間で議論が交わされた。

また、重度の障害のある子どもが小中学校で学ぶ際の具体的な指導内容や体制づくりについては、同じポスター会場で、重複班の研究成果として発表していた別ポスター「重度・重複障害のある子どもの実態把握、教育目標・内容の設定、及び評価等に資する情報パッケージの開発3」に参考となる事項が多く、2つのポスターを行き来して理解を深めようとする参加者が多く見られた。

### Ⅳ. 自主シンポジウムによる情報交換

大会の中日、9月18日(日)には、朱鷺メッセ会場において自主シンポジウムを行った。この自主シンポジウムは、先に紹介した重複班平成27年度予備的研究で行った研究成果について情報交換によって

理解を深め、更に今後の研究につなげるために行ったもので、表題は、ポスター発表と同じく「小中学校で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実～教育目標・内容、交流及び共同学習、支援体制に焦点をあてて～」であった。この自主シンポジウムには、会場の定員100名を超え、会場に入りきれないほど多くの参加者が訪れた。

## 1. 自主シンポジウムの概要

自主シンポジウムの企画者は重複班班長であり、平成27年度予備的研究の研究代表者でもある本報告の第一著者であった。研究に協力いただいた名寄市立名寄西小学校の遊佐理氏、仙台市教育委員会の菅澤美香子氏に話題提供をいただき、指定討論者は文部科学省初等中等教育局特別支援教育課の分藤賢之氏であった。重複班の第二著者が司会を行い、第三著者は話題提供者として仙台市の事例についての補足情報を提供した。以下、本自主シンポジウムの概要を述べる。

### 1) 企画趣旨

インクルーシブ教育システムの構築が推進される中、小中学校の特別支援学級にも、以前であれば特別支援学校の対象となっていた比較的重度の障害のある子どもが在籍するケースが見受けられる。平成27年度に、日本各地において重度の障害のある子ども（ここでは学校教育法施行令第22条の3に該当する程度の障害、またそれらを併せ有している状態とする）が小中学校の特別支援学級に在籍し学んでいる6事例について、教育目標・内容、交流及び共同学習の状況、支援体制などに焦点をあてた実地調査を行った。また、事例の担任が一堂に会してフォーカスグループインタビューを行い、教育を進める上で大事に考えていること、課題や解決のための工夫等について貴重な知見を得た（注：この研究成果については、ポスター発表で報告）。

本シンポジウムでは、この研究で調査対象となった事例の中から2つの取り組みについて、「子どもが何をどう学ぶかの明確化」「子どもの学びを支える仕組みづくり」の視点で話題提供を行い、さらに、重度の障害のある子どもが小中学校を教育の場とする

ことの意義について協議することを目的とした。

## 2) 話題提供者からの報告

遊佐理氏は「重度・重複障害のある子どもの交流及び共同学習を豊かにする支援と地域の支援の輪を広げる取り組み」の題目で、小学校の特別支援学級に在籍する重度・重複障害のある児童に対する教育の充実を目指した事例の取り組みを紹介した。2年前に市の教育委員会が学校看護師を配置したことで、当該児童（以後A児）は医療的ケアを受けながら毎日元気に登校できるようになった。小学校では、A児の全学年との交流及び共同学習を計画・実施し、児童同士が自然に関わる環境作りを工夫してきた。次第に声をかけてくれる児童が増え、A児も同年代の友だちと笑顔で関わるできるようになった。また、将来の地域生活を充実させるために、医療・福祉・教育の関係者や保護者が集まり、それぞれが描く将来像や悩み、現在の願いなどを共有する場を作ってきた。この支援の輪がA児へのよりよい支援方法について協議し、望ましい学習や生活を支えていくための原動力となっていた。遊佐氏の報告は、特別支援学校から遠く離れた地理的条件にある小学校の取り組みとして貴重な事例であり、現在多くの学校現場で課題となっている校内での障害理解や交流及び共同学習、地域のサポート体制等に大きな示唆を与えるものであった。一方、学習目標・内容の設定や評価に関しては、個人の教員の力や工夫に大きく委ねられていることは、課題として確認された。

菅澤美香子氏・第三著者は「医療的ケアを必要とする子ども本人の将来の夢につなげる教科学習とそれを支える合理的配慮」の題目で話題提供を行った。小学校の特別支援学級に在籍する当該児童（以後B児）は、知的な遅れはないが、人工呼吸器を装着し上下肢ともほとんど動かすことができない。B児は、算数・理科・外国語活動については交流及び共同学習で同学年の授業に参加し、その他の教科等は特別支援学級で学習していた。同じ病気で大学進学をした先輩に憧れていて「同じようになりたい」という願いの実現のため、数年先までを見通した学習計画の作成に本人も参加し、意欲的に取り組んでいた。市の教育委員会では、B児を含む市内の医療的ケア

を必要とする児童生徒が小中学校の特別支援学級で学べるよう、看護師の配置、必要な物品の購入、定期的な訪問・打ち合わせを通して、児童生徒の学習を保障するバックアップ体制を整えていた。さらに、市として小中学校の教員対象に個別の指導計画作成に関する研修会を実施し、提出された個別の指導計画を指導主事が確認する体制をとっていた。この仙台市の取り組みの報告は、子どもが願う将来を目指した「一貫した学び」を実現するために、自治体としての支援体制づくりが大変重要なものであることを示唆する事例であった。

### 3) 指定討論者からの提言

分藤賢之氏は「特別支援学級におけるカリキュラム開発」という視点から、学校（特別支援学級＝担任）をカリキュラム開発の主体者とみなし、学校（特別支援学級＝担任）には、開発する主体者としての自覚が求められる、と述べた。重度の障害のある子どもの教育を担う特別支援学級の担任は、子どもの将来像を描いたうえで「何を、どれだけ、どのように学ぶのか」を検討することが求められる。それを学校教育の全体計画である教育課程の中でどのように位置づけるのか、また、その取り組みを支える教育委員会等の役割について、今後も議論を深めていく必要があることが提言された。

## 2. 会場の様子とフロアからの質問等

会場は100名を超える参加者で埋め尽くされ、大変盛況であった。また、このシンポジウムには聴覚障害のある方の参加があり、会場ではモニターを用いた要約筆記が行われた。

フロアからの質問は、仙台市における看護師配置の体制整備に関すること及び全国的な状況、特別支援学級の個別の指導計画作成にかかる市のサポートに関すること、小学校で学ぶ重度・重複障害のある児童の学習の評価に関すること、等であった。

会場の参加者は、話題提供者の報告やコメントに熱心に聞き入る様子が見られた。また、自主シンポジウム終了後にも、話題提供者や企画者への個別の質問やコメントが数多く寄せられ、このテーマへの関心の高さをうかがわせた。

## V. おわりに

以上、日本特殊教育学会第54回大会の概要と、平成27年度重複班牙備的研究「小中学校等で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実に関する予備的研究～就学の経緯、教育目標・内容、交流及び共同学習の状況等に焦点をあてて～」にかかる研究成果の発表及び情報交換の内容について報告した。先に述べたように、本大会のメインテーマは「インクルーシブ教育の時代における Special Education」であり、今回、重複班が行った研究成果の報告は、まさにこのテーマにふさわしく、多くの参加者の関心を集めるものであった。インクルーシブ教育システムにおける重度の障害のある子どもの教育のあり方、方法、展望等について、この領域に大きな示唆を与える発表であったと考える。自主シンポジウムにおける情報交換によって得られた有意義な知見については、今後の研究に活かしていきたい。

### 引用文献

- 日本特殊教育学会. <http://www.jase.jp/> (アクセス日, 2016-12-10)
- 日本特殊教育学会第54回大会 (2016). <http://www.jase.jp/taikai54/greeting.html> (アクセス日, 2016-12-10)

### 参考文献

- 国立特別支援教育総合研究所 (2016). 予備的・準備的研究「小中学校等で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実に関する予備的研究～就学の経緯、教育目標・内容、交流及び共同学習の状況等に焦点をあてて」(平成27年度) 研究のまとめ. 齊藤由美子・小澤至賢・大崎博史 (2016). 小中学校等で学習する重度の障害のある子どもの教育の充実に関する研究～教育目標・内容、交流及び共同学習、支援体制に焦点をあてて～. 日本特殊教育学会第54回大会プログラム.